

虞美人草（大野恵造）

四面は 楚歌 四面は 楚歌

寄するは 漢の 兵ども

虞や 虞や 汝を 奈何せん

花の顔 莞爾たり

玉手 則ち 一剣を 執つて

己の 胸を 貫けば

鮮血 淋漓 地を 覆う

嗚呼 嗚呼 嗚呼 年々 歳々

生い 出でて 咲くは

これ 真紅の 虞美人草

解説 敵に囲まれて虞美人がとつた行動が虞美人となり毎年咲き誇るといふ伝説を詠った詩。

語釈 ※虞美人草||ヒナゲシの別名。虞美人が自決したときの血が、この花になったといふ伝説がある。楚の武将・項羽の愛姫のこと。※四面楚歌||敵に囲まれて孤立し、助けを求められないことのたとえ。孤立無援。※虞||虞美人のこと。※奈何||どのよう。どうして。※莞爾||につこりほほえんでいるさま。

※玉手||美しくつややかな手。※淋漓||水・汗・血などがしたたり落ちるさま。

通釈 敵に囲まれて孤立し、助けを求められない状態の時、近づくのは漢の兵士達。虞よ、虞よ。汝はどのようなにするのか。花のような美しい顔をにつこりと微笑み、美しい手に剣を執つて、自分の胸に貫いた途端、鮮やかな血が滴り落ち、その血は地を覆うが如くであった。毎年、この地から生えて咲くのは真つ赤なヒナゲシの虞美人草であるといふ。